23　次の文章（唐子西「」）は、に銘（器物などに、来歴や功績などを記したもの）を記すに当たって書かれたものである。なお古硯は長い年月を経たものほど珍重される。よく読んで、後の設問に答えよ。

　〈大阪市立大（現　大阪公立大）〉二〇二〇年度出題

　㆓ 筆　墨㆒、 　類　也。　処　相　、　用　　　相　　也。 （注四）　 ㆓ 相　 也。①筆　之　　㆑ 　墨　之　　㆑ 　、硯　之　　㆑ 　。　　　也。　㆑ 　也、　　、　㆑ 、　　者　也。　㆓ 　　 而　　　 乎。其　㆑ 　也、　　、　㆑ 、　 者　也。②　㆓ 　 而　　　 乎。Ⓐ　㆑ 　而　 　焉。㆑ 　㆑ 、㆑ 　 。　、「寿　 　也。㆓ 鈍　鋭　動　　一㆑（注八）　筆　不㆑ 　 、吾　㆓ 　 ㆓ ㆑ 　久　 。」㆑ ③寧　 　勿㆑ 。　、「不㆑ ㆑ 　㆑ 　㆑ 。不㆑㆑ 　㆑ 　㆑ 。　　、　　　 。」

（『古文真宝後集』より）

〔注〕　（一）気類――（文房具として）同類のものであるということ。

（二）出処――使用され、置かれる場所のこと。

（三）任用――愛情をこめて扱い、使用されるということ。

（四）――「寿」は命の長いこと、「夭」は若死にすること、命が早く尽きること。命の長短。

（五）体――姿。本質。

（六）用――作用。働き。

（七）数――ここでは運数（運命）のこと。

（八）――支配すること。

問１　傍線部①「筆之㆑墨之㆑、硯之㆑」とはどういうことか、「筆」「墨」「硯」それぞれの「寿」（「寿」はここでは寿命のこと）の違いがわかるように説明せよ。

問２　傍線部②をわかりやすく現代語訳せよ。

問３　傍線部③について、

（ア）　傍線部③を書き下し文にせよ。但し、読み方がわかるように、すべて平仮名で記すこと。なお送り仮名は一部省略している。

（イ）　「此」「彼」の指示する内容を、それぞれ本文の語によって端的に表すと、次のⓐからⓓの語の組み合わせのうちどれに相当するか、適当なものを一つずつ選べ。（「此」を解答欄Ⅰに、「彼」を解答欄Ⅱに記すこと。）

ⓐ　鈍・鋭　ⓑ　静・動　ⓒ　鈍・静　ⓓ　鋭・動

◎問４　傍線部Ⓐについて、硯や筆墨について考えたことを参考にして、この文章の筆者はどのようなことを悟ったというのか、本文全体の趣旨を踏まえて、わかりやすく説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　Ａ筆の寿命は日数で数えるほど短く、Ｂ墨の寿命は月数で数える程度で、Ｃ硯の寿命は世代数で数えるほど長いということ。

Ａ＝３〔「以日」を訳せていなければ０。「日単位で」などと訳していても可。「るほど短く」はなくても可。〕

Ｂ＝３〔「以月」を訳せていなければ０。「月単位で」などと訳していても可。「る程度で」はなくても可。〕

Ｃ＝４〔「以世」を訳せていなければ０。「世代単位で」などと訳していても可。「ほど長い」はなくても可。文末不整合は減点１。〕

問２　Ａ・Ｂなんと、じっとしているものは寿命が長く、せわしなく動き回るものは寿命が短いではないか。

全体が詠嘆形（なんと～ではないか）で訳せていなければ減点５。

Ａ＝５〔「静」と「動」が対比されていなければ０。「静」「動」のどちらかの訳が不適切であれば減点２。「せわしなく」はなくても可。〕

Ｂ＝５〔「寿」と「夭」が対比されていなければ０。「寿」「夭」のどちらかの訳が不適切であれば減点２。〕

問３　（ア）＝むしろこれをなすともかれをなすことなかれ。

　　（イ）　Ⅰ＝ⓒ　　Ⅱ＝ⓓ

問４　Ａ筆や墨の消耗が早く、硯は長持ちするのは、Ｂその形状と用いられ方によることから、Ｃ人も同様にゆったりと構え、物事におおらかに対処することが長生きの秘訣であること。

Ａ＝３〔「筆」「墨」や「硯」の寿命の違いについて言及していなければ０。「筆、墨、硯の順に寿命が長くなっていくのは」などと説明していても可。〕

Ｂ＝３〔「筆」「墨」や「硯」の寿命の違いが生じる原因について言及していなければ０。形状や用いられ方について具体的に説明していても可。〕

Ｃ＝４〔人間の寿命について言及していなければ０。「のんびりと落ち着いて日々を過ごす」などと説明していても可。文末不整合は減点１。〕

【書き下し文】

ととは、しなり。く、相近きなり。りのみは相近からざるなり。の寿はをてへ、の寿はを以て計へ、硯の寿はを以て計ふ。のはぞや。其のたるや、筆はもく、墨はにぎ、硯はきなり。に鈍き者は寿にして鋭き者は夭するにずや。其の用たるや、筆は最もき、墨は之に次ぎ、硯はかなる者なり。豈に静かなる者は寿にして動く者は夭するに非ずや。にてをふをたり。を以て体とし、を以て用と為さん。ひとく、「寿夭はなり。鈍静のするに非ず。筆鋭からず動かざるも、吾其の硯とになるはざることをるなり。」と。りとも、問３（ア）ろを為すともを為すことかれ。に曰く、「鋭きこと能はず、つて鈍を以て体と為す。動くこと能はず、因つて静を以て用と為す。だ其れ然り、是を以てくをらふ。」と。

【現代語訳】

硯と筆と墨とは、思うに（文房具として）同類のものである。使用され置かれる場所も互いに似通っており、愛情をこめて扱い、使用されるという点においても共通している。（しかし）その寿命に限ってはそれぞれ異なっている。筆の寿命は日単位で数え、墨の寿命は月単位で数え、硯の寿命は世代単位で数えるほどだ。それはどうしてか。その姿かたちは、筆が最もっており、墨がこれに続き、硯（にいたって）はずんぐりとしている。なんと、ずんぐりした形のものは寿命が長く尖っているものは寿命が短いではないか。（また、）その働き（＝作用）については、筆は最も（せわしなく）動き、墨がこれに続き、硯はじっとしている。問２なんと、じっとしているものは寿命が長く（せわしなく）動き回るものは寿命が短いではないか。私はこのことで生命を養生するということを理解した。鈍い形態を保ち、静かに行動しようと思う。ある人が言うことには、「寿命が長いか短いかは（天が決めた）運命である。鈍いか鋭いか動くか静かであるかに支配されるものではない。たとえ筆が鋭くなく（せわしなく）動かないとしても、私は筆が硯と同様に久しく長く存在することは不可能だとわかっている。」と。たとえそうであったとしても、これ（＝鈍と静）を行っても、それ（＝鋭と動）を行ってはいけない。この硯の銘を刻んで言うことには、「（私は）鋭くなることはできない、だから鈍いことを（私の）形とする。（私はせわしなく）動き回ることができない、だから静かであることを私の身の処し方とする。そうであればこそ、このように長生きすることができるのだ。」と。